

人名索引

《著者紹介》

村松 晋 むらまつ・すすむ

1970年11月生まれ。長野県出身。1993年3月埼玉大学教養学部歴史学コース卒業。2000年3月筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科史学専攻修士、博士（文学）。

東京都立航空工業高等専門学校、東京家政学院筑波女子大学各非常勤講師を経て、2004年4月聖学院大学人文学部日本文化学科専任講師。2008年4月同准教授。2013年4月より同教授。専攻は近代日本思想史・精神史。

〔著書〕『三谷隆正の研究——信仰・国家・歴史』（刀水書房、2001年）。

〔論文〕「内村鑑三の非戦論をめぐる一考察——精神史の視点から」（千葉真編著『平和の政治思想史』、おうふう、2009年）、「松田智雄と信州——ある戦後農村精神史への試み」（『信濃』63巻4号、信濃史学会、2011年4月）など。

近代日本精神史の位相

——キリスト教をめぐる思索と経緯

2014年3月31日 初版第1刷発行

著者 村松 晋
発行者 阿久戸 光晴

発行所 聖学院大学出版会
〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号
電話048(725)9801/Fax048(725)0324
E-mail: press@seigakuin-univ.ac.jp
印刷 株式会社堀内印刷所

©2014, Susumu Muramatsu
ISBN978-4-907113-07-0 C3010

- A
アウグスティヌス (Augustinus, Aurelius) 236, 239, 242-246, 254, 255, 263, 282
アダム, カール (Adam, Karl) 223, 229, 253
アドルノ (Adorno, Theodor) 165
アリストテレス (Aristoteles) 219, 220
- B
バルト, カール (Barth, Karl) 65, 173, 174, 185, 187, 194, 196, 201-203, 223-226, 231, 232, 239, 283, 289
父ブルームハルト (Blumhardt, Johann Christoph) 179-185, 188, 200, 201
子ブルームハルト (Blumhardt, Christoph Friedrich) 183, 189
ブルンナー (Brunner, Emil) 224
ベーコン (Bacon, Francis) 221
ベルジャエフ (Berdjaev, Nikolaj Aleksandrovich) 147
- C
クリステイ (Christie, Dugald) 101
- D
デカルト (Descartes, René) 212-219, 221, 222, 226, 228-231, 260, 281
デフォー, ダニエル (Defoe, Daniel) 83
デュモリノン (Dumoulin, Heinrich) 263, 282
デリダ, ジャック (Derrida, Jacques) 64
ドストエフスキー (Dostojevskij, Fjodor) 258, 265, 268, 284
- F
フロイト (Freud, Sigmund) 217, 218, 260
- G
ゲオルグ (George, Stefan) 150, 157, 158, 160, 161, 165, 166, 169, 170
ゴッリッツァー (Gollwitzer, Helmut) 179
- J
ジャクソン (Jackson, Arthur) 101
- H
ハイデガー (Heidegger, Martin) 217, 218, 222, 230, 260
ヒットラー (Hitler, Adolf) 113, 114
ヘーゲル (Hegel, Georg Wilhelm Friedrich) 215, 216, 218, 224, 230
ホルクハイマー (Horkheimer, Max) 165
- K
キルクゴール (Kierkegaard, Sören) 121, 147, 162, 170, 171, 220, 276
ケーベル (Koeber, Raphael) 168

第五章 波多野精一と敗戦

1 問題の所在

波多野精一（明治十年～昭和二十五年）は、大正半ばから昭和十年代初頭にかけ、西田幾多郎や和辻哲郎ともども、京都帝大文学部で教鞭を執り、みずからのキリスト教信仰に根ざす、独自の宗教哲学を確立した学者として知られている。全六巻の全集は、『宗教哲学』（昭和十年）、『時と永遠』（昭和十八年）といった、重厚かつ精緻な学術書で占められており、あたかもその巻頭に掲載された、波多野自身の厳格な風貌を象徴するかのようである。かくして「時論」の類を含まない、全集の「超時代的」性格を反映してか、従来の波多野研究には一定の偏りが見受けられる。すなわち、「神学」あるいは「宗教哲学」的な観点から草せられたものもつばらで、その社会認識や同時代認識を組上に載せた論文は、管見の限り、皆無に近いとい点である。⁽¹⁾ 如上の研究状況は、その交流圏に西田や和辻、三木清、また田辺元や西谷啓治ら、狭義の「哲学者」の枠を超え、少なからず時局にコミットした論客を有する思想家への視角としては、明らかに不十分だと言わなければならない。⁽²⁾ 日本プロテスタント史上、否近代日本思想史上において、類まれな業績を遺した波多野の全体像を詳らかにするためには、「神学」的・「宗教哲

- (35) たとえば、善光寺に隣接する「城山」にて「満洲青少年義勇軍六七〇余名ノ壮行式」が「壮大二行ハ」れたと記す昭和十四年六月十九日の日記には、授業「第一時」に「青少年義勇軍ノ目的、聖戦ノ意義等話ス」とあり、迷いや屈託は全く見られない。
- (36) 長野県における郷土教育運動については、伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』（思文閣出版、二〇〇八年）を参照。
- (37) 信州教育と「京都学派」の関係について、金井徹「務台理作の信濃教育会における役割の検討——信濃哲学会を中心とした京都学派との関係に着目して」（『東北大学大学院教育学研究科年報』六一巻二号、東北大学大学院教育学研究科、二〇一三年六月）を参照。
- (38) この点、様々な論点を提起する論考として、長野県歴史教育者協議会編『酒薬開拓青少年義勇軍と信濃教育会』（大月書店、二〇〇〇年）を参照。

「学的」的観点に偏った従来の研究成果に対し、今こそ別の視角からする、新たな知見を付け加えていく必要がある。そもそも波多野について、たとえばその社会認識・同時代認識を照射する資料は、全くないというわけではない。全集第六巻が収める多数の書簡、なかでも敗戦前後の手紙をひもとくと、波多野がその論文とは一転、実に直截に時局への見識を述べていることに気づかされる。それは「公開」を前提として書かれたものではないだけに、戦時下ならびに占領下の日本を生きた波多野のまなざしを、ありのままに伝える貴重な言葉と考えられるのである。本稿は以上のような課題意識に則って、これまで触られてこなかった波多野の社会認識・同時代認識、なかんずく敗戦前後のそれを、彼が遺した書簡に着目することで、その一端なりとも明らかにしようとする試みである。用いる資料は限定的であるものの、本稿が波多野をよりトータルな視点から捉え直す試論となり、さらには、近代日本におけるキリスト教受容の問題を考えるための一契機ともなり得れば幸いである。

2 敗戦をめぐる真情——明治の「栄光」

波多野の敗戦認識に肉迫するための手がかりとして、ここではまず、彼が「昭和二十年八月十五日」をどのような迎えたいかを問うことから始めたい。この点、示唆に富む一文として、「玉音」放送からほどなくして草されたと思われる、以下の書簡が注目される。

拝啓 本日正午、ラヂオによつて陛下の玉音を拝し、感激措く所を知りませんでした。ご英断、何といふあ

涙に咽びました。これでわが国民わが文化は破壊より救はれました。……尤もこれからどんな困難がわれへの行くを遮り現はれるでせうか。しかしどんな困難でもそれを克服し得べき途は開かれ、復興と発展との望みはわれへの進路を照してをります。御持論通り、国体と歴史とに基を据え、精神と道義とに生命の中心を置く、わが国の文化の建設は、われへのたふとき、よろこびに充ちたる、新しき任務でなければなりません⁽³⁾

ここに明らかなように、昭和二十年八月十五日正午、「終戦」を告げる昭和天皇の肉声を、波多野もまた「ラヂオの前」で聴いていた。後に見るように、波多野は眼前の戦争を、「文化と生命とを破壊する戦争の暴威を痛切に感ぜしむる、こんどの戦争はどのようなものか」と痛嘆していただだけに、報せを「敗戦」としてよりも、「わが国民わが文化」を「破壊より救」うべく下された、天皇の「英断」を告げるものとして聴き、「感激措く所を知りませんでした。ご英断、何といふありがたさかたじけなさでせう」とまで天皇への思いを吐露し、さら

に戦後日本の使命に関し、それは「国体と歴史とに基を据え、精神と道義とに生命の中心を置く、わが国の文化の建設」だとして言い切る姿勢など、「意外」に映るかもしれない。しかしこの時期、波多野の手紙は、およそこのうした「告白」で占められており、まだ、彼がかねてより、言うところの「国体」を重視していたことは、敗戦直前の八月十一日、教えず宛ての書簡において、「一億玉碎などといふこけおどしの声も以前より聞えてをりますが、

ち、この戦争は「陸軍軍閥」といった人々が、波多野の享受してきた「理想」、すなわち「国体の精神を戴きつ、これらの叙述が表すように、波多野は戦争の要因を、いささかシンプルな二項対立図式として把握した。すなわ

今まで秘密にされてゐた実情も一部分ははつきりと公表されるやうになり、ますますその感を深く致します。⁽⁹⁾ 引摺られた国民の、無知自惚の夢より起つたのだと信じてをりました。戦争が終り、正真正味の敗戦ときまり、上侵略であると信じてをりました。又大東亜戦争も、根本においては、軍人や指導者たち、並びに彼等に誤り私はずっと以前から、日本が武力主義をとつたことは、根本的の誤りで、何と弁解しようと支那^{支那}事實は事實

い所であります。⁽⁸⁾

こんどの戦争終結によつて軍閥といふ特權階級が姿を消すであらうことは、私の衷心よりのよろこびを禁じ難て皇室又は国家を利用しようとする甚だ危険な、乃至不敬な要素が多分に含まれてゐる事が明かだと思ひます。陸軍軍閥が国體護持とか皇室中心などと呼んでゐるもののうちには、自己の階級の特權利益等の支持者とし

眞の自覺へと向ふべき機会を与へられたものだと思はれます。⁽⁷⁾

こんどのありがたき御詔書によつて、多数の国民は指導者たちが彼等に強いた無知と自惚の夢よりさまざ

ては、たとえば次のような「戦争理解」が示唆に富む。

においてその訳は、彼のいわゆる「明治時代の理想」に内在するものとは見なされていなかった。この問題に関し

それどころか国體をも犠牲⁽⁵⁾し兼ねない戦争に突入し、ついに「文化と生命とを破壊する」に至つたのか。波多野

然らば、かくも重まれた時代を過ぎた祖国日本は、なによえ「自由主義」を圧殺するのみならず、「国民をも、

想」のゆえと自負されていた。

するものであるどころか、何ら問題なく並立し得ることであり、しかもそれが可能となつたのは、「明治時代の理

「国体の精神を戴きつ、」キリスト者であること、まして「自由主義」を奉ずる一人であることは、互いに「衝突」

とを別個に捉えてそれぞれを区別する、いわば二元論的な思考が垣間見える。しかし波多野の実感に即して言えば、

短い一節ではあるが、次節で言及するように、ここには「国体の精神」が支配する世俗領域と、信仰生活の領域

明治時代の理想が復活するであらうことは、又となきよろこびなのです。⁽⁶⁾

には、日清戦争以来の新領土は無くなつても、国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許された

物には裏もあり又弊も伴ふのでありますが、私などのやうに若い時から自由主義のうちに呼吸して來たもの

としての「明治」への確信だつた。

目される。その自覺の基底にあつたのは、以下の書簡に如実なとおひ、若き日の時代経験、ことに「自由」の時代

しかも如上のまなざしは、キリスト者・波多野において、何ら「矛盾」を含むとは捉えられていなかった点に注

あつた。

自暴自棄の聲でなくて何でせうか⁽⁵⁾と、「国民」の存在以上に「国體」を重んじる、その切迫した独白に明らかで

これはとんでもない事で、国民をも、それどころか、国體をも犠牲にしてさ、やかな名譽欲を満足させようとする

自由主義の恩沢に浴することを許された明治時代の理想」を退けて、「武力主義をと」るなかで引き起こしたものであり、一方、天皇を含む「多数の国民」は、「陸軍軍閥」らに「無知と自惚の夢」を強いられ、「利用」され、「誤り引き摺られ」てきた、文字通りの「被害者」だとの図式であつた。波多野は「昭和の戦争」を、「明治の理想」を体験し得た者の立場から、以上のように把握した。

こうした「対立」図式に基づいて、かの戦争を「総括」するならば、敗戦は、「明治時代の理想」を蔑した面々が「掃され」ることにより、あらためて「明治時代の理想」が建てられるための「好機到来」と期待されるのは必然だった。事実、波多野は戦後日本のグラントデザインを、「明治時代の理想」の「復活」として、次のように説いていた。

記者団との会見における、首相の宮殿下の御答へは、今までの御座なりの声明などと雲泥のちがひで新内閣の為政の方針、従つて今後の国是を大胆率直に明瞭に力強く開陳したものとて、深き感銘をもつて読みました。殊に圧迫に対して自由を、武力主義に対して文化主義を、侵害主義に対して平和協調主義を、新しき日本の理想として掲げた点は、衷心よりの感激と満腔の尊敬とを喚び起さずにはゐられません。私どものやうに明治時代に育つたものは、その真の精神その深き魂が、新しき時代を導くべき炬火となつて国民の行く手を照さうとしてゐるのを見て、なつかしさうれしさで胸一杯になります。私は以前より日本は明治時代に帰らなければならぬことを痛感してをりました。最近には領土などは擲つて明治時代の昔に帰り謙虚と聡明との精神をもつて裸一貫より出直はすべきである信じ、東京の某氏と文通によつて肝胆相照らしてゐたのであります。⁽¹¹⁾

ここで波多野が賞賛する、「首相の宮殿下」の「御答へ」とは、東久邇宮稔彦首相が、米軍先遣隊上陸の八月二十八日、記者団を前に行った会見のことで、いわゆる「一億総懺悔」論としても知られるものである。しかしながら、右の引用に明らかによい、波多野はこの点に重きを置いた読み方は、全くしていない。手紙は、会員が新聞に掲載された八月三十日の翌日に、さっそくしたためられており、読後、波多野が受けた感銘の大きさを照射するものとなっている。波多野の「読み方」それ自体、興味深い論点をはらんでいるが、ここで注目したいのは、波多野が文中、「圧迫に対して自由を、武力主義に対して文化主義を、侵害主義に対して平和協調主義を、新しき日本の理想として掲げ」て進みゆくことを、戦後日本がようやく手にすることを得た「新しい」針路としてでなく、「明治時代の昔に帰」ることとして表現している点である。

この主張は、過去への「郷愁」に基づいた単純な「復古志向」とは異なっている。「圧迫に対して自由を、武力主義に対して文化主義を、侵害主義に対して平和協調主義を掲げ」ることが、「明治時代の理想」と同義に解されている事実が証するように、波多野にとつて「明治時代の理想」とは、時代や地域を超えて、普遍的な国家理想として捉えられていた。したがって、「明治時代の昔に帰」るとは、彼がその生涯を賭けて求め続けた、普遍的なもの、理想的なものの再確立が含意されていた。その意味で、波多野が「玉音」放送終了後、戦後日本の使命に関し、開口一番、述べた事柄が、「キリスト教」でも「神」でもなく、「国体と歴史とに基を据え、精神と道義とに生命の中心を置く、わが国の文化の建設」であつたのは故なことではなかつた。

右記の手紙が草された翌々日の九月二日、東京湾に停泊中の戦艦ミズーリ号船上で、降伏文書の調印式が執り行われた。日本の敗戦、「確定」の時である。「日清戦争以来の新領土」獲得の歴史を生ききてきた、「明治人」波多野にとつて、この日は、人間的には、「悲痛」な思いを禁じ得なかつたかもしれない。しかし、「玉音」放送一週間に

して、すでに「日清戦争以来の新領土は無くなつても、国体の精神を戴きつゝ、自由主義の愚沢に浴することを許さるゝに臨んでもたじろぐことはなかつた。「明治人」波多野は、来るべき日本に、「日清戦争以来の新領土」以上の世界、「国体と歴史」に基を据え、精神と道義とに生命の中心を置く」いわば真の明治の「栄光」を垣間見ていたからである。

降伏文書調印から三日後の九月五日、波多野が「最も古い弟子の一人」⁽¹³⁾に宛てた書簡には、戦後日本に託された彼の希望が率直に記されている。その筆致は、『全集』六巻巻頭に掲載された峻格な風貌と精緻な学術論文からは想像もできないほどに、素朴で飾らず、明るさに満ちたものだった。

私は総理大臣の宮殿下の記者団への御答へを読んで、その率直な誠実な態度にいたく打たれました。将来の国是として自由、平和、文化の三つの理念を高く掲げてゐる点には、満腔の共鳴と感激と感謝とを覚えました。これでなくてはなりません。これこそ我が国が新しく又永遠に生き得る所以であります。全体主義や武力主義で心がゆがんで育て上げられた今時の若い人たちは、明治の御世の新鮮な空気を無邪気に吸つたわれ／＼老人のやうに無邪気な感激を感じないかも知れません。……しかしかゝういふ理念が国民の進み行く道の行手を照す炬火として掲げられた事その事だけでも、大変な変革です。実にうれしい事です。

それにつけても、私は長生きがしたくありません。私はもう年老い、精力は殆ど使ひ尽して、新しき時代の建設に何の新しき貢献をもなし得ぬであります。しかし、私はその新しき世界の希望の曙光を身にあびるまで、この世に留まるを許していただけるならば、何といふ幸福であります。

例えば波多野は、敗戦後間もない書簡の中で、「新しき任務」「新しき生」そして「新しき御世の新しき光」等々、戦後日本を「新しき」といふ言葉で形容し、またそこに、「光」のイメージを重ね合わせてやまなかつた。波多野にとつて敗戦は、この「光」を覆ひ隠してきた「全体主義や武力主義」が一掃されるが、「自由、平和、文化の三つの理念を高く掲げた」「明治時代の理想」が、「国民の進み行く道の行手を照す炬火」となるといふ「希望の曙光」そのものにはかならなかつたのである。

3 時代への眼——その特質

こうした波多野の敗戦認識を、いかに捉えていくべきか。この点を議論するための手がかりとして、波多野より三十七歳年下になる、丸山眞男の言葉を引用しておきたい。丸山は、昭和二十五年三月のある座談において、津田左右吉を念頭に置きつつ、次のような「世代分析」を述べている。いわく「あんな素晴らしかった日本を後の奴がめっちゃめちゃにしてしまったという感じと、そんなめっちゃめちゃになるような『素晴らしさ』はもう真つ平だという感じとの間には大分ズレがあり、それが学問の世界でも、例えばは老大家と若い歴史家との間の問題意識のちがひとして現れてきている[傍点原文、以下同じ]」と。

本章で見えてきた波多野のまなざしは、丸山のこの著名な指摘そのままに、「老大家」津田左右吉にも相通ずる、典型的な「オールドリベラリスト」のそれである。丸山は石発言に続け、「昭和になつて急に横合から軍部という

乱暴者が出てきて、かくの先代の苦心の経営を台なしにしてしまったという風に理解せず、これをどこまでも明治時代に内在していた契機の顕在化として捉えて行くことが必要⁽¹⁷⁾との指摘をしているが、この点、波多野はまさに丸山が言うように、

「昭和になつて急に横合から軍部という乱暴者が出てき」たせいで、「あんなに素晴らしかった日本」が「めちゃめちゃに」なつたことを「明」ちやに「な」つたと思つていたことは明らかである。それだけに「日本」が「めちゃめちゃに」なつたことを「明治時代に内在していた契機の顕在化」と捉える丸山のような見方には、到底、与し得なかつたと思われる。

ここで、彼我の「正否」を検討することは試みないが、ただ、丸山の指摘をふまえた上で、あえて論点を提出するならば、やはり、先に質した波多野の言葉「国体の精神を戴きつゝ、自由主義の恩沢に浴すること」を許された明治時代の理想⁽¹⁸⁾、この表現が看過し得ない論点を胚胎していることは否定できないように思われる。すなわち波多野において、みずから「国体の精神を戴きつゝ、自由主義の恩沢に浴すること」を許された⁽¹⁹⁾のは、その「恩沢」ならびに「許された」という表現が示唆するように、「明治時代の理想」の、いわば「賜物」だつた。しかし、波多野が「国体の精神を戴きつゝ、自由主義の恩沢に浴し得たのは、それを「明治時代の理想」が「許」したがゆえといふよりも、むしろ波多野その人が、みずからの信仰と異質ないし対極の精神を「戴きつゝ、行くことを問題としなかつたから、言い換えれば波多野において、その信仰と現実との緊張関係が希薄であつたから、このように捉えることもできるのではないだろうか。それは何も敗戦直後の書簡からのみ受ける印象でない。冒頭でその一節を引用したが、たとえば、戦時下における次の書簡に注意を促したい。

今の若い人々はわれ／＼のやうにいろ／＼と反省などはせずに、いはゞ「言挙げ」せず、まつしぐらに時

局の真只中に突入して行くやうです。やつぱり戦争をやるにはこれではなくてはいけません。しかし戦後にはきつと戦争に関する反省が強く盛に湧き起るでせう。私にはこんどのやうに関係諸国が戦争をあたりまへの事柄とあたまから認めてかゝり、国際的エゴイズムを露骨に肯定してかゝつてゐる戦争は、近時にはめづらしいやうに思はれます。それだけに、戦争も生きるか死ぬるか最後の決定を促すやうな苦烈を示してゐるやうです。文化と生命とを破壊する戦争の暴威を痛切に感ぜしむる、こんどの戦争ほどのものはこれまでになかつたやうに思はれます。果してこれでいゝでせうか——戦争の現実の中に没頭してゐる間は、これは禁ぜらるべき聞ひですが、戦後はきつと思慮及び教養ある人々の心と頭とを悩ますにちがひないといふやうな気持ちで私は禁ずることが出来ません⁽¹⁹⁾。

ここには眼前の戦争の無謀さを問い質し、祖国の将来を憂えるトーンが強くなるが、この一文に限らず波多野には、いわゆる「大東亜戦争肯定論」に類する言葉は、一切見られないことをあらためて強調しておきたい。ただ、波多野における戦争否定の「根拠」を問い直してみると、そこにはキリスト者ならではの色合いが、いささか乏しい感を受けないだろうか。右の文で言うならば、「文化と生命を破壊する戦争の暴威」との一節が示唆するやうに、波多野において戦争は、キリスト者として、その信仰の原点から否まれるものというよりも、ただ「文化」への関心、その存続への危機のゆえにこそ、否定の対象となつてゐる印象がある。

同様のまなざしは、ナチス崩壊の知らせを受けた便りにも垣間見える。

かねてひそかに恐れた事、予期した事ではありますが、ドイツもとう／＼仆れました。これはわれ／＼にと

米軍司令部の指令は実にうれしく又感謝に堪へない事柄です。実にわれ／＼は米國によつて精神的に救はれたのだと申しても過言でありません。……進歩と改善、否精神的革命の警鐘が打たれ、目標は這の行くへに高くあざやかに掲げられ、実現の第一歩は確實に踏み出され、生れかはつた新しき世の希望の曙光が輝きそめたのですから、私のやうな老人もこの新しき生きがひのある御世にあふを得た幸福を感謝しつゝ、生ををほること

あつた。昭和二十年暮れの書簡には次のような述懐も見てとれる。

波多野はアカデミシャンとしての立場から、もともとアメリカには高い評価をしておらず、ある書簡の中では「米國はPlatonicの見地よりはZoro⁽²³⁾に倣⁽²⁴⁾」とまで断言してはばからなかった。しかし右に見られるように、敗戦後一カ月を経ての手紙では、伝聞に基いて、「アメリカ軍」を「わが國の救済者として感ぜずにはいられません」とまで述べている。時おりしも昭和二十年十月は、G.H.Q.により、いわゆる「五大改革指令」が出された月でもあった。波多野は先に示したとおり、「昭和になつて急に横倉から軍部という乱暴者が出てき」たせいで、「あんなに素晴らしかつた日本」、具体的には「國体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴すること」を許された「日本が、めぢやめぢやに」されたと考えていただけに、一連の改革を、「軍部という乱暴者」を一掃し、以て「國体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴すること」を許された明治時代の理想」を復活せしめるものとして、熱く歓迎したのである。

かにさしてゐませうが、わが政府や当局がなすべくしてなすべき勇氣と誠意と力を欠いてゐるやうな点を、
 あたかも医師がメスをもつて臆でも出してくれるやうに一々突いてくれるのは、ありがたい事です。私は、ア
 メリカ軍をわが国の救済者として感ぜずにはゐられません。

東京からの便りによつても、又当地方の新聞紙の記事によつても、進駐軍の態度は頗る堂々たる立派なものであり、それに兵士たちはいかに無邪気なほがらかなあかいる生活をしてゐるさうで、心ある者は尊敬の念を禁じ得ないやうです。……マッカーサー総司令部の命令や言論にはアメリカ式のドラマチックの片影はたし

敗戦後一カ月を闊した時期、「進駐軍」たる「アメリカ軍」に向けられた次のような評価もある。

右の書簡を見る限り、波多野が「ナチズム」に批判的なのは、キリスト者として、その擬似宗教性が認められな
いからでも、その侵略主義が許せないからでもない。彼がナチス崩壊につき、「決して悲しむべきことではありま
せん」と述べるのは、「ナチズム」が「天才や独創心を萎縮せしめ」、「優秀な獨創的文化の青の余地」を排除・殲
滅したからにはかならない。いわば波多野は「ナチズム」を、キリスト者としてよりも、「思慮及び教養ある人々」
の一人としての立場から、批判しているのである。

つて大きな痛恨事であります。しかし、ドイツはきつとまた起ち上るにちがひありません。尤もそれは文化の方向精神の方向においてでありませうが、ナチス主義は勢力を失ふでせうが、それは大体において決してむべきことではありません。ナチズムはドイツの国民精神を鼓舞発揚した功績はたしかにあります。しかし私った代償も可なり高価だったので。かのスバルタ式の軍国主義、窮屈極まる統制主義画一主義は天才や独創心を萎縮せしめました。あの偏狭な民族的独善主義は毛嫌ひした猶大人の選民思想と何の折ぶ所がありません。御用哲学御用文学御用科学の横行闊歩する処には優秀な独創的文化の育つ余地はないでせう。かう考へますと他山の石といふ感じを全くはらひのぞけるわけには行かぬと存じます。

が出来ませう⁽²⁴⁾

この手紙の執筆時期は師走も押し詰まった頃だけに、波多野は激動の「昭和二十年」を振り返り、この月に出されたいわゆる「神直指令」をはじめ、敗戦以来の「米軍司令部の指令」を顧みて、「救済者」としての思いを強くしたのに相違ない。しかしそうした感慨は、当時の日本共産党における「占領軍＝解放軍」規定を想起させるものであり、それだけに、キリスト者としての刻印は希薄と言わざるを得ない。

この点、同時代キリスト者の敗戦認識を概観するならば、たとえば矢内原忠雄や南原繁は、敗戦を神の〈裁き〉と受け止める点で波多野と共通していたものの、しかし、彼らはみずからの信仰に基づいて、祖国日本の現状を、エザの「バビロン捕囚」に重ね合わせて理解していただだけに、占領軍たるアメリカに対しても、等しく神の前なる存在として、批判・相対化する目標を失うことがなかった。両者において、日本・アメリカいずれの国も、あくまでも「地の国」であり、それらを手放して礼賛することは断じてあり得なかった。また、矢内原や南原には、祖国の〈裁き〉をエザの預言者さながらに「慟哭」をもって受け止める一面が濃かったが、波多野はその点「恬淡」とした感があることも興味深い。

戦争をはじめ、現実に向き合う際の、波多野のこうしたスタンスは、波多野研究を志すものに、ひとつの論点を投げかけているように思われる。事実、敗戦後十年を経た昭和三十年、「近代日本とキリスト教」を考える座談が持たれているがその中で、波多野に近い人々からも以下の指摘がなされている点を看過すべきでない。いわく「どうも波多野先生の眼中には、日本の現実よりも海外の学界のあるサークルのことがあるといった高踏的な態度があったのではないかととも思われる」⁽²⁵⁾「もし波多野先生が、西田先生や田辺先生と同じように、現代の精神的境位に立

4 おわりに——晩年の波多野とその可能性

以上、本章では、日本プロテスタント史上、類まれな業績を遺した波多野精一その人を、「時代」を生きた一人の思想家として、よりトータルな視点から捉え直す契機を探るという立場から、従来の波多野研究で等閑視されてきた、彼の社会認識・同時代認識に肉迫すべく、遺された書簡に着目した考察を行ってきた。終わりに臨み、波多野の可能性、それも従来の論考では指摘されてこなかった一面に注目することで、これまでの「波多野論」とはいささか趣の異なつた本章をしめくることがしたい。それは敗戦から一年あまり、疎開先での近況を知らせる次の手紙が開示する世界のことである。

私の方は別にこれといって申上げるやうな波瀾もなき、いつもながらの平安な、しかし、平凡ないかにも老人らしき隠棲の生活を、この静かな同じく平安平凡な田舎町につけてをります。たゞ時折り幾分のささなみ

をこの安らかな平面に呼び起すのは、当地方の二三の人々の来訪であります。それは、農家の主人、農場に働いてゐる青年、国民学校の校長、画家といふやうな人々で、その画家が今年特選に這入つたといふのを除いては、一人も世に名を知られてゐる人もなく又学者もありません。画家と申す人も、当地の最も由緒ある旧家のなれの果てで、今は殆ど純然たる農夫です。話題も世間話し、身の上話し、体験談、素人人生観のたぐひで、や、念入りなので、私の「時と永遠」を数回もわからぬながらに熟読した校長さんの幼稚な、しかし、素直な、無邪気な、真心のあふれた質問と感想、一農家の主人の、二十年に亘つて、殆ど何等の進歩も見せずに、ギリシア語の聖書にかじりついてゐた人の幼稚な、しかし時としては専門家をも瞠若せしめるやうな適切な鋭い質問ぐらゐるものです。私は七十歳の今日、はじめて一つの別天地に接して、今までに味はないやうなよろこびを覚えてをります。多くの新しい人生の真理を知り味ひを味ひました。この体験は私の老年にあかるさあたたかみを加へてくれました。この二年近くの田舎住ひは私にとって美にたふとき体験を与へてくれました。感謝あるのみです⁽³¹⁾

やや長くなつたが、ここで注目したいのは、波多野が陳開先で出会つた人々、すなわち「農家の主人、農場に働いてゐる青年、国民学校の校長、画家といふやうな人々」との交流を顧みて、それを「今までに味はないやうなよろこびを覚え」、多くの新しい人生の真理を知り味ひを味ひましたと語っている点である。周知のとおり論壇は、「近代主義」的な潮流に覆われて、農村ならびにそこで生活する人々のありようは、「封建遺制の残存」などと糾される傾向が強かつた。現実的にも、都市部の食糧不足をあてこんだ「闇取引」等々、農村に疎開していればこそ、「純然たる農夫」をめぐる芳しくない噂話も、

少なからず耳に入つたことだらう。しかし波多野は陳開先にて、おそらくはそうした見聞を経ながらも、都下に住む知己に向け、農村の人々の「エコイスマ」や、あるいは「社会的関心の欠如」を指摘するような手紙をしたためはしなかつた。逆に波多野は右の文中、「素直な、無邪気な、真心のあふれた質問と感想」と、ただみかける形容詞が示唆するように、陳開先で触れ合つた「純然たる農夫」たちの誠実さ、その真摯さにこそ、心打たれていたのであつた。

しかも波多野は現実には、かような「農夫」らと真摯かつ対等に向き合おうとした。たとえば先の書簡で「一農家の主人の、二十年に亘つて、殆ど何等の進歩も見せずに、ギリシア語の聖書にかじりついてゐた人」と評された「農夫」・長原一郎は、「先生の友情は、身分、地位、学問の有無を超えて迫つて来る。純粋に澄み切つた友情は尊く忘れ難い」とその交わりの様を振り返つていた。また学徒兵として出征し、敗戦後、帰郷してゐた三浦所太郎は、千厩なる波多野に親炙した経歴を次のように顧みた。「先生、私はどうも先生と呼ぶより、オジイさんと呼びたい気持ちです。そう呼ばしてゐたゞいてもよいでしょうか」と聞きましたら、とてもよろこんで承知して下さいました⁽³²⁾。「不純を許さない先生に無心に近づけば友として深い交りを経られ、幼稚や無学をいやしめたり憐れんだりすることなしに謙遜に対等に交わつていただきました」と。

顧みて、波多野は厳格な学究として、大学人としての生涯を貫いてきただけに、交流圏は決して広くはなく、そのほとんどは、同様のアカデミシヤンで占められていたと思われる。しかも波多野は、弟子の田中美知太郎が、京大時代の言葉として伝えるように、「隣人とはほとんど没交渉に暮らすことのできたやうな、戦前の山の手の個人主義的な生活を、小うるさいことの多い京都の生活にくらべて」懐かしみ、「日本では、東京の山の手の手が一番住みやすい」と評するやうな生活感覚の人だつた。それだけに農村での疎開生活は、時に「小うるさい」と感ずる

〔註〕

- (1) 最近の研究として、佐藤啓介「波多野精一」の存在、愛一論——無からの創造論に注目して（『日本の神学』四六号、日本基督教学会、二〇〇七年九月）、嶋沼裕子「日本キリスト教史における『他者』理解をめぐって——波多野精一の諸問題——近代日本のキリスト教思想研究から」（『アジア・キリスト教・多元性』一〇号、現代キリスト教思想研究会、二〇一二年三月）、「波多野宗教哲学における死の問い」（『キリスト教研究紀要』一〇号、京都大学キリスト教研究室、二〇一二年三月）がある。いずれも示唆に富むが、中でも声名論文は本章のモチーフとの関連で興味深い。特に本書十章における言論論は、氏の視点と相通するものがあるとも考える。ただ、声名氏が指摘する波多野の「時代批判」によつても、本章で提示した波多野の同時代認識とそれらはらむ論点は、依然、問われるべき（尚題）として残るのではないだろうか。
- (2) 波多野の交流圏にあった思想家群への視角を深める上で、米谷匡史『「世界史の哲学」の帰結 戦中から戦後へ』

沢に浴することと許され」続けてきた自身の状況を、時代の中で反芻し、新たな社会認識、同時代認識を獲得する可能性を秘めていたように思われるのである。

歴史叙述に「仮定」は禁物かもしれない。しかし、敗戦後、波多野がもうしばらく存命であつたなら、彼はおそらく新時代にふさわしい「あかざとあた、かみ」を携えた言説で、「農家の主人、農場に働いてゐる青年、国民学校の校長、画家というやうな人々」に届くかたちで、必ずや紡ぎ出していたに違いない。『全集』六巻巻頭に収録された波多野の相貌、ことに疎開先での、いかにも好々爺然とした一枚が、その確かさを確信させるのである。

「所謂大衆」を疑問視し、「頭脳勤労者」「知識階級」を称揚する波多野のこうした文章は、読みよつては、時勢の変化を認めずに、ただひたすら、その境遇の動揺を危惧したものと受け取れる。しかし、波多野の疎開先での言動を見る限り、その目線には、未知の世界に向けられた開放的な志向性がはらまれているだけに、波多野は「中流の知識階級」にして「頭脳労働者」たる己の立場、さらに、「今まで」「今まで」「国体の精神を戴きつゝ、自由主義の恩

わが国の政治も、余程注意し覚悟してかゝりませんと、民主主義の聲に圧倒されて、所謂中流の知識階級の没落、所謂大衆乃至プロレタリアの専制を促進することになりませう。私にはよくわかりませんが、今日の形勢では、或は労働者の月収が頭脳勤労者のそれを凌駕し、後者は最もきびしい生活難に陥り、子弟の教育、徒つて、次の世代の知識階級の育成に至難の業とすることになりはしますまいか。素人眼には、憂慮すべき事柄のやうに映じます⁽³⁹⁾

は次のような言葉も見出せる。

もちろん波多野の手紙を仔細に見ると、右の「期待」に反することとき文盲が、皆無というわけではない。たとえ

すべきではないだろうか。

この事実は、波多野が「七十歳の今日」に至るまで「味はな」かつたその新しい生活を、「今まで」の自己の世界を開放し、その視座や価値観を拡大ないし鍛造する一契機となし得たことを照射するものとして、あらためて注目

の主人、農場に働いてゐる青年、国民学校の校長、画家といふやうな人々」と「謙遜に對等に交わつた」のだつた。こともあつただろう。しかし波多野は、疎開先での生活を、窮屈な、度し難いものとして否定しなかつた。「農家

- 『現代思想』二三巻一号、青土社、一九九五年一月、大橋良介編「京都学派の思想——種々の像と思想のボナシヤル」(人文書院、二〇〇四年)に教示を得た。また個々の思想家についての論考は多いが、特に藤田正勝『西田幾多郎——生きることと哲学』(岩波書店、二〇〇七年)、嘉戸一将『西田幾多郎と国家への問い』(以文社、二〇〇七年)、村部直『光の領国 和辻哲郎』(岩波書店、二〇一〇年。初出は創文社、一九九五年)、熊野純彦『和辻哲郎——文入哲学者の軌跡』(岩波書店、二〇〇九年)に示唆を受けた。
- (3) 香川鉄蔵宛書簡 昭和二十年八月十五日、岩手県千厩町(以下、千厩)から。以下、特に断りのないものは全て千厩宛の書簡。(『波多野精一全集』六巻、岩波書店、一九六一年、三五七頁。本巻からの引用は、原則として巻数抜きて『波多野』とのみ略記)。なお香川は元大蔵省嘱託。『波多野』所収の香川宛書簡は四二通で、田辺元宛(四人通)、村岡典嗣宛(四五通)、和辻哲郎宛(四五通)に次ぐ。香川と波多野の関係については、香川「波多野さん——私の理想の人」(松村克己・小原國芳編『追憶の波多野精一先生』、玉川大学出版部、昭和四十五年。以下、『追憶』と略記)を参照のこと。
- (4) 香川鉄蔵宛書簡 昭和二十年六月二十八日、『波多野』、三四九頁。
- (5) 村岡典嗣宛書簡 昭和二十年八月十二日(『波多野』、一〇四頁)。村岡ならびに波多野との関係については新保祐司『村岡典嗣——学問の永遠の相の下に』(同『日本思想史骨・構想社』、一九九四年)、安藤敏真『村岡典嗣と波多野精一 邂逅する二つの『学問的精神』』(『北海学園大学人文論集』39、北海学園大学人文学会、二〇〇八年三月)が示唆に富む。なお田中美知太郎は、波多野の自宅を訪ねた際、『漱石全集』のほか『西陛下の写真』がその座敷に掲げられていたことを回顧しているが(田中「ひとつの私的回想——波多野先生と古典研究」、『追憶』、五七頁)、波多野における一面を示すものとして興味深い。
- (6) 石原謙宛書簡 昭和二十年八月二十三日(『波多野』、二四九頁)。「波多野」には七一通の石原謙宛書簡が収められ、最多である。石原謙と波多野の関係については、石原の四編の回想『波多野精一先生』、『波多野先生を懐かしみて』、『波多野先生の横顔』、『波多野精一先生』(いずれも『追憶』)を参照のこと。
- (7) 松村克己宛書簡 昭和二十年八月二十五日(『波多野』、二八二頁)。松村は前掲『追憶』の編者をつとめ、同書に五編の文章を寄せている。『波多野』所収の松村宛書簡は六三通で、石原に次ぐ。なお戦時中の松村の言動について、宮田光雄「権威と服従——近代日本におけるローア書十三章」(新教出版社、二〇〇三年、一六六一―一七三頁)を参照のこと。敗戦後の松村は上記の帰結として難しい立場に置かれるが、当時の松村宛書簡は、波多野が如上の「事情」をふまえてしたためただけに、波多野の思想と人柄の一面を伝えるものとして貴重な資料と思われる。
- (8) 香川鉄蔵宛書簡 昭和二十年九月一日、『波多野』、三五九頁。
- (9) 同 昭和二十年九月十一日、『波多野』、三六〇頁。
- (10) 波多野が示した「二項対立」的な「戦争理解」について、同時代におけるその作為性・政治性を剥抉した研究として、吉田裕『昭和天皇の終戦史』(岩波書店、一九九五年)が示唆に富む。また敗戦前後の昭和天皇の言動が、波多野の「予想」とは異なっており、きわめて「政治的」であったことを実証した作品として、千本秀樹『新装版 天皇制の侵略責任と戦後責任』(青木書店、二〇〇三年)を参照のこと。
- (11) 松村克己宛書簡 昭和二十年八月三十一日、『波多野』、二八三頁。
- (12) 東久邇宮首相の「一億総懺悔」論に関しては、吉見義明「占領期日本の民衆意識——戦争責任論をめぐって」(『思想』八一号、岩波書店、一九九二年一月)、ならびに前掲『新装版 天皇制の侵略責任と戦後責任』(一四四―一四七頁)を参照のこと。
- (13) 石原謙「波多野精一先生」前掲『追憶』、一頁。
- (14) 石原謙宛書簡 昭和二十年九月五日、『波多野』、二五一頁。
- (15) 丸山眞男「座談会 日本の運命——興廢の岐路」、『世界』昭和二十五年三月号(『丸山眞男座談』二巻一九五〇―一九五八、岩波書店、一九九八年、二三八頁。なお本座談に関しては「丸山眞男発言抄」として、丸山の言葉だけが収められている。ちなみに丸山の他の座談参加者は、安倍能成、荒畑寒村、大内兵衛、鶴見祐輔、長与善郎、長谷川如是閑、吉野源三郎である)。
- (16) いわゆる「オールドリベラリスト」が欲した「自由」の思想的特質とそのゆえんを具体的に説いたものとして、小能英二『「民主」と「愛国」——戦後日本のナショナリズムと公共性』(新曜社、二〇〇二年)五章「左翼の『民族』保守の『個人』」(特に一九〇―二〇八頁)を参照のこと。また「オールドリベラリスト」の思想を概観する上で、橋川文三編『保守の思想』(戦後日本思想体系)七巻、筑摩書房、一九六八年)が示唆に富む。

- ただ、津田左右吉（明治六年生）を除くと、「オールドリベラリスト」として知られる面々は、たとえば安倍能成（明治十六年生）、小泉信三（明治二十一年生）、和辻哲郎（明治二十二年生）ほか、波多野より年下が多い。また「オールドリベラリスト」はいわゆる「大正教養派」とも一部重なるが、彼らと同時代のキリスト者、なかんずく「新渡戸・内村門下」は、同じ世代でありながら、問いの構えにおいて明確な差があった。この面からも、キリスト者・波多野を「オールドリベラリスト」と完全に同一視することは慎重であるべきは当然である。なお関連する論考として拙稿「大正思想史をめぐるもう一つの視点」（『聖学院大学総合研究所 newsletter』Vol.14, No.3, 2010年1月、一頁）を参照のこと。
- (17) 前掲『丸山眞男座談』二巻、二四〇頁。
- (18) 同。
- (19) 香川鉄蔵宛書簡 昭和二十年六月二十八日、『波多野』、三四九頁。
- (20) 佐藤治六宛書簡 昭和二十年五月三十日（『波多野』、四一九頁）。ちなみに佐藤治六は、かの「佐藤紅緑」で、佐藤宛書簡は『波多野』に七通収められている。そのうち昭和二十一年十月十四日付書簡では、佐藤の息子が二人戦死したことへの悔みを述べた後、「八郎君が御健在で、立派に世間で働いてゐられ、盛名を馳せてゐられるのはせめてもの御慰めではありませうが、世を去られたかたの御代りとは申しにくく、御心中察するに余りあります」（『波多野』、四一四頁）と述べている。「八郎君」とは「サトウハチロー」のことであり、作詞した「リンゴの唄」は、周知のとおり、敗戦直後のヒット曲となつたため、当時、「盛名を馳せてゐた。佐藤治六家については娘・佐藤愛子が描いた『血脈』（上・中・下、文藝春秋、二〇〇五年）を参照のこと。
- (21) この点、ナチスの主張を擬似「宗教」となし、同時代日本の思想状況を仮託して内在的に批判した思想家として南原繁の名をあげることができる。その思想構造と時代における射程を解析した作品として、下島知志「南原繁の共同体論」（論創社、二〇一三年）を参照。
- (22) 山谷省吾宛書簡 昭和二十年十月十八日（『波多野』、一二四―一二五頁）。『波多野』には山谷宛書簡一〇通を収める。山谷と波多野の関係については、山谷「波多野先生の追憶（葬儀の辞）」、『波多野精一先生の追憶』（『追憶』）を参照のこと。

- (23) 村岡典嗣宛書簡 大正十年六月五日、京都府愛宕郡田中村から。『波多野』、七五頁。
- (24) 山谷省吾宛書簡 昭和二十年十二月二十二日、『波多野』、一二六―一二七頁。
- (25) 敗戦直後における日本共産党の現状認識に関しては、宮村治雄「自由への垂鉛——戦後天皇制論の遺産」（同『戦後精神の政治学——丸山眞男、藤田省三・萩原延壽』、岩波書店、二〇〇九年。初出は中村政則他編『戦後思想と社会意識』、岩波書店、二〇〇五年）を参照のこと。
- (26) たとえば昭和二十年九月五日の石原謙宛書簡（註14参照）には、「戦敗も要するに神の御さばきです。その奥には神聖なる全能なる力、しかし又同時に恵みが立つてをります。どうぞその御恵みをすなはに受入れたいものです」（『波多野』、二五〇―二五一頁）との記述が見られる。
- (27) 矢内原忠雄の敗戦認識に関しては、将棋面書「矢内原忠雄と『平和国家』の理想」（『思想』九二八号、岩波書店、二〇〇二年六月）、大濱徹也「矢内原忠雄にみる日本精神」（『無教会研究』七号、無教会会研修所、二〇〇四年九月）を、南原のそれについては田崎嗣人「南原繁における『戦後』——『敗戦』と『贖罪』」（『政治思想研究』六号、政治思想学会、二〇〇六年五月）を参照のこと。
- (28) 敗戦時の知識人における「祖国日本」への「熱度」の差について、前掲大濱論文ほか、同「歴史としての戦中・戦後」（『北の丸』三五号、国立公文書館、平成十四年十一月）を参照のこと。この点、波多野にとって敗戦はあくまで「解放」であり、「祖国」敗れたりといった痛覚は乏しいように見受けられる。本書三章註2も参照のこと。
- (29) 久山康の発言。久山康編『近代日本とキリスト教』、創文社、昭和三十一年、二九一九―三〇〇頁。
- (30) 同、三〇〇頁。ちなみに、この発言の後、久山は「この波多野先生の立場や影響について高坂「正頭 引用者注」先生はどうお考えになりますか」（同、三〇一頁）と高坂に尋ねるが、高坂は「それは北森「嘉蔵 引用者注」君の方で……」（同）と発言を避け、北森もまた「……」（同）で応答していない。
- (31) 安倍能成宛書簡 昭和二十一年十一月九日（『波多野』、四四五頁）。安倍宛書簡は『波多野』に六通収められている。
- (32) たとえば大塚久雄のような知識人が、敗戦直後の農村と農民をどう見ていたか、そのまなざしを具体的に紹介したものととして、前掲『「民主」と「愛国」二章「総力戦と民主主義」の中の「大衆」への嫌悪』（同、九六―九八頁）ほか、安丸良夫「戦後思想史のなかの『民衆』と『大衆』」（同『現代日本思想論 歴史意識とイデオロギ―』、岩波

- 書店 二〇〇四年。初出は『岩波講座 近代日本の文化史』9、岩波書店、二〇〇二年）が示唆に富む。
- (33) 松村克己は、千厩時代の波多野のあり方をことに重視しており、次のような印象的な言葉を遺している。「後世の歴史家が、此の時期の先生を生涯における最も影響力の強かった時代として、また後世に残る最大の業績を示した時として叙述する日が来るのではあるまいか、と私はひそかに考えるのである」(松村「千厩時代の波多野精一先生」、『追憶』、一〇三頁)。
- (34) 長原一郎「知己を得て」(『追憶』、二〇八頁)、『波多野』には長原宛書簡七通を収める。
- (35) 三浦所太郎「おじさん」(同、一〇一頁)、『波多野』には三浦宛書簡二通を収める。
- (36) 同「千厩時代の波多野精一先生」(同、一〇六頁)。
- (37) 前掲「ひとつの私的回想——波多野先生と古典研究」(同、五八—五九頁)。「波多野」には田中美知太郎宛五通を収める。ちなみに田中の波多野に対する深い理解をふまえた論考として、新保祐司「波多野精一論序説——上より」の垂直線」(同「批評の測鉛」、構想社、一九九二年。初出は『アステイオン』一八号、TBSブリタニカ、一九九〇年七月)を参照のこと。
- (38) 『追憶』、五八頁。
- (39) 香川鉄蔵宛書簡 昭和二十一年三月十日、『波多野』、三六八頁。
- (40) 本章で取り上げた波多野の書簡はいずれも、註33で松村が評価する「千厩時代」に属している。すなわち、本章が問い質してきた波多野の同時代認識・社会認識は、全て、陳開先の千厩を場として示されたものである。この間、もしも波多野が在京で、敗戦前後の状況に「直に」さらされていたならば、そのまなざしはまた違ったものになったかもしれない。もう一つの「仮定」として指摘しておきたい。

第六章 水上英廣とキリスト教

——敗戦直後の論考を中心に

1 問題の所在

水上英廣(明治四十四年―昭和六十一年)は、ニーチェの翻訳に傾注したドイツ文学者として知られた存在である。キルケゴールやベルジャエフの訳者として、水上の名に親しんだ向きも少なくないだろう。その「専攻」からすると、水上とキリスト教のかかわりを探究しようとする本章の課題設定は、「意外」にも思われるかもしれない。事実、水上が宗教史・キリスト教史の論考で取り上げられたことは、管見の限りでは皆無である。この点、同じドイツ文学者で、またニーチェの翻訳でも名高い竹山道雄が、「ドイツ文学」の域を超え、そのキリスト教への対し方も含め、今なお取り上げられることがある状況に比べると、著しい対照をなしている。⁽¹⁾

しかし、水上が敗戦直後にしたための論考をひもとくと、彼は「過ぎ去った思想家」であるどころか、今なお看過すべきでない、〈キリスト教〉をめぐってのきわめて原理的な問題を論じていることに気づかされる。ここでは敗戦後間もない昭和二十二年に発表された、「能動的ニヒリズムの問題」と題する論考に注意を促したい。水上はこの一文で、日本における「二つのニヒリズム」を指摘して、次のように述べている。